

Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	竹ノ下, 弘久(Takenoshita, Hirohisa)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2015
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.20 (2015. 7) ,p.168- 169
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20150704-0168

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

竹ノ下 弘久

このたび、『三田社会学』において、拙著『仕事と不平等の社会学』について、非常に的確で、丁寧な書評をしてくださった長松奈美江氏に、心から感謝申し上げたい。そして、拙著を『三田社会学』の書評に取り上げていただき、書評へのリプライの機会を与えてくださった編集委員会に、お礼申し上げたい。

本書は、弘文堂の現代社会学ライブラリーの 1 冊として、社会階層論の概説書として書かれた。その際に、統計分析の手法を用いた現代社会に関する経験的な分析結果やその知見ばかりでなく、現代社会における不平等構造を明らかにするために必要な、階層論の理論枠組みや考え方を論じることに重きを置いた。このような本書の性格づけは、同ライブラリーの企画をされた弘文堂の中村憲生さんからの助言、アドバイスにもとづくものである。翻って、これまでの日本語で書かれた社会階層論の概説書、入門書を見てみると、その多くは、階層論の理論や考え方の説明よりも、統計分析の手法を用いて、現代日本の階層構造を経験的に記述し、明らかにするものが多い印象を受けていた。社会学の中でも、社会階層と不平等は、研究の歴史が長く、蓄積の多い分野でもある。そのため、この分野の類書との違いを明確にするためにも、本書は、理論や考え方の整理に重きを置き、今後の階層研究の方向性を明らかにすることを目指した。

評者である長松氏が明確に指摘してくださったように、本書は、社会階層論の視点、考え方を、制度と階層との関連を軸に、読み解きなおしたものである。読者のなかには、階級・階層構造と社会移動を扱った前半部と、制度と階層との関係を扱った後半部が、一見するとうまく論点がつながっていないようにみられるかもしれない。しかし、長松氏の指摘にもあるように、1 章から 3 章における階級・階層構造の理論枠組みは、その理論が産出された社会における不平等構造や不平等をとりまく制度的状況によって、大きく枠づけられてきた。とりわけ、ヨーロッパの階級理論とアメリカにおける階層理論との間には、不平等の構造や、その結果として生じる社会移動の考え方に、大きな違いがある。社会学理論の生成に、特定の社会における構造や制度の影響を無視することができない以上、社会階層研究において、制度論の視点を大胆に組み込むことは、さらなる理論の展開を実り多いものとするのではないだろうか。

評者は、著者と同様に、近年の階層研究の展開における制度の重要性に同意しつつ、本書の問題点と今後の課題を次のように論じる。すなわち、「本書では、必ずしも労働市場の状況に影響を与える、あらゆる制度が取り上げられているわけではない。労働市場における不平等と制度編成との関係を、個別テーマに注目しながら論じていく作業は、今後の階層研究の課題である」。長松氏は、そのなかでも、各国の制度的状況の違いをもたらす要因や、制度を支え変化を

竹ノ下弘久「著者リプライ」

『三田社会学』第 20 号 (2015 年 7 月) 168-169 頁

もたらす要因に関心がある。言いかえれば、著者が後半の各章で示したのは、各国の制度の相違から、不平等の構造や移動のあり方の違いを説明しようとしたのに対し、長松氏は、そうした不平等を支える制度そのもののあり方や、制度と労働者、行為者との関係にも注目すべきことを提案する。そのような考えは、マルクス以来の階級論の伝統でもある、階級・階層と政治というテーマとも関係すると評者は論じる。

著者も、基本的に長松氏の提案に賛成である。階級・階層と政治との関係を考察するためには、労使関係や雇用関係をめぐる制度の形成・変容過程の検証が不可欠である。日本の階層研究は、長く階級概念の使用を避けてきた。しかし、雇用主と労働者との雇用関係についての考察は、階級論が得意とする領域でもある。階級論の成果をふまえつつ、雇用関係をめぐる制度やその政治についての検討は、不平等を支える制度に関する考察を深めることに大きく寄与するであろう。

著者自身も、長松氏の提案とは異なる視角から、本書において階層・不平等と政治とのかかわりについて触れている。筆者は、日本の階層研究について、長い間、社会全体の不平等の度合いやその変化に注目するなど、社会変動論の側面を強調するあまり、不平等の是正に貢献するための社会政策の構想にあまり関与してこなかったと感じている。これまでの日本や諸外国の社会政策、とりわけ福祉レジーム、雇用政策、家族・教育政策は、不平等の構造にどのような影響を及ぼしてきたのか。日本の階層研究では、教育社会学者による、教育制度と教育達成に関する研究を例外として、政策と不平等との関係についての研究が不足している。階層論が、格差・不平等の縮小、是正に貢献するという観点から、政策と不平等との関係についての考察を、さらに深めていくべきではないだろうか。階層論の中に、制度論の視点を導入することは、政策と不平等との関係を考える上で不可欠である。制度論の視点から、階層構造や不平等の仕組み、変化を精緻に明らかにすることは、今後の階層研究の重要な課題である。

(たけのした ひろひさ 上智大学総合人間科学部)